

江戸川亂歩 甲賀三郎
谷崎潤一郎 浜尾四郎

🔊 日漢對照
有聲版

日本短篇 推理小說選

錢曉波 譯

中和出版
OPENPAGE
中

目次

- 心理試験 江戸川乱歩 / 002
- 心理測試 江戸川亂步 / 003
- 譯者解讀** 走上職業作家道路的里程碑式作品
—— 江戸川亂步與《心理測試》 / 086
- 琥珀のパイプ 甲賀三郎 / 090
- 琥珀煙斗 甲賀三郎 / 091
- 譯者解讀** 「本格」推理路線的倡導者與堅持者
—— 甲賀三郎與《琥珀煙斗》 / 158
- 途上 谷崎潤一郎 / 162
- 途中 谷崎潤一郎 / 163
- 譯者解讀** 蓋然性犯罪的先驅之作
—— 谷崎潤一郎與《途中》 / 218
- 夢の殺人 浜尾四郎 / 222
- 夢魘魔殺 浜尾四郎 / 223
- 譯者解讀** 出身顯赫的法曹界推理小說家
—— 浜尾四郎與《夢魘魔殺》 / 272

一

ふき や せい ちろう な げ しる よう おそ あくじ
 路屋清一郎が、何故これから記す様な恐ろしい悪事を
 おもいた 思立ったか、その動機については詳しいことは分らぬ。又
 たといわか 仮令分ったとしてもこのお話には大して関係がないのだ。
 かれ 彼がなかば苦学見たいなことをして、ある大学に通っている
 た 所を見ると、学資の必要に迫られたのかとも考えられ
 る。かれ まれ み しゅうさい しか ひ じょう べんきょう か
 彼は稀に見る秀才で、而も非常な勉強家だったか
 ら、学資を得る為に、つまらぬ内職に時を取られて、好き
 がくし え ため ないしょく と き と す
 な読書や思索が十分出来ないのを残念に思っていたのは確
 かだ。だが、その位 ぐらい り ゆう にんげん だ いざい おか
 のだろうか。恐らく彼は先天的の悪人 だいたいの悪人 だったのかも知れな
 い。そして、学資ばかりでなく他の様々 ほか さまさま よくぼう おさ か
 なたのかも知れない。それは兎も角、彼がそれを思いついて
 から、もう半年になる。その間、彼は迷いに迷い、考え
 かんが あげく けっきやく けっしん
 に考えた揚句、結局 やっつけることに決心したのだ。

ある時、彼はふとしたことから、同級生の齋藤勇と親

一

路屋清一郎縁何會想到去做本故事將要講述的，如此膽大包天之事，其動機不甚了了。不過，即便知道動機，亦與本故事無太大關礙。他就讀於某所大學，時不時靠勤工儉學賺取學費。由此看來，能想像是因手頭拮据，為學費所困之故。他是個不可多得的秀才，且勤奮好學，為積攢學費，疲累於瑣碎零工，耗時頗多，少有時間埋頭於喜讀之書，亦無暇勤以思考。然而，僅僅因為這個緣由，人難道會犯下這般重罪？或許，他生來便是個惡徒也未可知。不僅僅因為學費，還兼而遏制着其他各式各樣的慾念。總而言之，心懷此番念頭，已有半年之久。在此期間，他思來想去，百般思量，最終下定決心，要將計劃付諸行動。

有次，因某件偶然之事，他與同年級的齋藤勇之間的關

しくなった。それが事の起りだった。初めは無論何の成心があった訳ではなかった。併し中途から、彼はあるおぼろげな目的を抱いて齋藤に接近して行った。そして、接近して行くに随って、そのおぼろげな目的が段々はっきりして来た。

齋藤は、一年ばかり前から、山の手のある淋しい屋敷町の素人屋に部屋を借りていた。その家の主は、官吏の未亡人で、といっても、もう六十に近い老婆だったが、亡夫の遺して行った数軒の借家から上る利益で、十分生活が出来にも拘らず、子供を恵まれなかったかの娘は、「ただもうお金がたよりだ」といって、確実な知合いに小金を貸したりして、少しずつ貯金を殖して行くのを此上もないたのしみにしていた。齋藤に部屋を貸したのも、一つは女ばかりの暮しでは不用心だからという理由もあっただろうが、一方では部屋代丈けでも、毎月の貯金額が殖えることを勘定に入れていたに相違ない。そして彼女は、今時余り聞かぬ話だけれども、守銭奴の心理は、古今東西を通じて同じものと見える、表面的な銀行預金の外に、莫大な現金を自宅のある秘密な場所へ隠しているという噂だった。

路屋はこの金に誘惑を感じたのだ。あのおいぼれが、そんな大金を持っているということに何の価値がある。それを俺の様な未来のある青年の学資に使用するの、極めて合理的なことではないか。簡単に云えば、これが彼の理論

係變得親近起來。這成了事情的起因。一開始當然不存有任何企圖，然而漸漸地，他抱着某種模模糊糊的目的開始接近齋藤。同時，隨着兩人關係的不斷加深，曾經相當模糊的目的亦逐步變得清晰起來。

就在一年前，齋藤在城中高地^①某個冷清的街鎮中，向普通人家^②租了間房。這家主人是位寡居的官太太，說是這麼說，其實是個已年近六旬的老婦。靠出租亡夫留下的幾棟房子，過着充裕的生活。即便如此，膝下無子，孑然一身的她常言道「唯有錢才最可靠」，因此，有時也會弄點小錢放貸給可信賴的友人。眼看着存款一點一點增加上去，這漸漸成了老婦最大的生活樂趣。之所以將房間出租給齋藤，一方面老太太是想到唯有女性的生活環境頗不安全。另一方面，即便房租只有那麼一丁點兒，老太太無疑是考慮到每月又能讓存款有所增長之故。無論古今中外，財迷的心理均相差無幾。如今倒是很少聽到這種事了，除去表面上的銀行存款，據傳，老太太還有筆巨款藏匿在自家隱秘的地方。

這筆錢，對路屋產生了誘惑。老傢伙藏着那麼一大筆錢，

① 山の手：指城區中地勢較高之處。

② 素人屋：非專業民宿。僅將房間出租的普通人家。

だった。そこで彼は、齋藤を通じて出来るだけ老婆についての智識を得ようとした。その大金の秘密な隠し場所を探ろうとした。併し彼は、ある時齋藤が、偶然その隠し場所を発見したということを聞くまでは、別に確定的な考えも持っていた訳でもなかった。

「君、あの婆さんにしては感心な思いつきだよ、大抵、縁の下とか、天井裏とか、金の隠し場所なんて極まっているものだが、婆さんのは一寸意外な所なのだよ。あの奥座敷の床の間に、大きな紅葉の植木鉢が置いてあるだろう。あの植木鉢の底なんだよ。その隠し場所がさ。どんな泥坊だって、まさか植木鉢に金が隠してあるとは気づくまいからね。婆さんは、まあ云って見れば、守銭奴の天才なんだね」

その時、齋藤はこう云って面白そうに笑った。

それ以来、路屋の考えは少しずつ具体的になって行った。老婆の金を自分の学資に振替える径路の一つ一つについて、あらゆる可能性を勘定に入れた上、最も安全な方法を考え出すとした。それは予想以上に困難な仕事だった。これに比べれば、どんな複雑な数学の問題だって、なんでもなかった。彼は先にも云った様に、その考を纏める丈けの為に半年を費したのだ。

難点は、云うまでもなく、如何にして刑罰を免れるかということにあった。倫理上の障礙、即ち良心の呵責という様なことは、彼にはさして問題ではなかった。彼はナ

又有何價值呢。若是能在我這種前途無量的年輕人的學費上，這才既合情又合理。簡單說來，這便是他的論調。於是，他通過齋藤盡可能地探聽老婦的情形，想要打探出那筆錢的藏匿之處。有次，齋藤很偶然地發現了藏錢的地方。而在路屋從齋藤那裡探聽到這條消息之前，他其實還未曾有切實實的計劃。

「哎，老太婆能想到這主意倒挺令人佩服的。一般來說，要麼外廊底下，要麼房頂夾層，藏錢之處不外乎這些，可老太婆藏的地方卻着實意外。裡間客廳的壁龕上不是擺着個挺大的紅葉盆栽嘛。藏錢之處就在那花盆的底部。無論甚麼樣的竊賊，絕對不會意識到盆栽裡竟然藏着錢。如此說來，老太婆還真是守財奴裡的天才吶。」

那時，齋藤饒有興味地笑着那麼說道。

由此，路屋的計劃逐步開始具體化起來。如何將老婦的錢一步步轉變為自己的學費，他設想了所有可能發生的事情，試圖尋找出最無懈可擊的方法。這可比想像中要難得多。與此相比，無論多複雜的數學題都變得輕描淡寫。因此，正如之前所述，僅僅為了制訂整個計劃，路屋就耗費了半年之久。

那麼究竟難於何處呢，不用說自然是如何逃避刑罰這個問題。對路屋來說，道德上的阻礙，即所謂良心的苛責，並不構成甚麼大問題。他認為類似於拿破崙那種大規模的屠戮

ポレオンの大掛りな殺人を罪悪とは考えないで、寧ろ讚美すると同じ様に、才能のある青年が、その才能を育てるために、棺桶に片足をふみ込んだおぼれを犠牲に供することを、当然だと思った。

老婆は滅多に外出しなかった。終日黙々として奥の座敷に丸くなっていた。たまに外出することがあっても、留守中は、田舎者の女中が彼女の命を受けて正直に見張番を勤めた。路屋のあらゆる苦心にも拘らず、老婆の用心には少しの隙もなかった。老婆と斎藤のいない時を見はからって、この女中を騙して使に出すか何かして、その隙に例の金を植木鉢から盗み出したら、路屋は最初そんな風に考えて見た。併しそれは甚だ無分別な考えだった。假令少しの間でも、あの家にただ一人でいたことが分っては、もうそれだけで十分嫌疑をかけられるではないか。彼はこの種のような愚かな方法を、考えては打消し、考えては打消すのに、たっぶり一ヶ月を費した。それは例えば、斎藤か女中か又は普通の泥坊が盗んだと見せかけるトリックだとか、女中一人の時に少しも音を立てないで忍込んで、彼女の目にふれない様に盗み出す方法だとか、夜中、老婆の眠っている間に仕事をする方法だとか、其他考え得るあらゆる場合を、彼は考えた。併し、どれにもこれにも、発覚の可能性が多分に含まれていた。

どうしても老婆をやっつける外はない。彼は遂にこの恐ろしい結論に達した。老婆の金がどれ程あるかよく分ら

並不構成罪孽，甚至還值得禮讚。與此相同，一個有才幹的年輕人，為培養這種才幹，犧牲個把早已一隻腳踩到棺材裡去的老傢伙，完全是理所當然的事情。

老婦幾乎不外出。整日默然地窩在裡間。偶爾外出時，鄉下女傭受其命盡心盡力擔起看家之責。路屋費盡心機，一點兒都找不出老婦的任何漏洞。瞅準她和齋藤不在之機，誘騙女傭出門辦點事兒甚麼的，趁此機會將錢財從花盆中盜走。路屋一開始曾經如此考慮過。然而，這卻是個相當輕率的主意。即便是很短的時間，若被發覺當時只有他一人在老婦宅中的話，不就有充分的理由被懷疑嗎？類似這般蠢笨的念頭，冒出來後又被否定掉，冒出來後又被否定掉，足足耗費了一個月的時間。又比如，耍個甚麼手段，假裝成錢是被齋藤，或是女傭，又或者一般竊賊偷走的。比如當女傭一人在家時，屏聲靜氣，趁其不備，將錢財偷盜出來。又或者深更半夜，趁老太婆睡熟之際幹這勾當。其他能想到的辦法，他都想遍了。然而，無論哪種辦法均很有可能被識破。

除了把老太婆弄死之外別無他法，他最終得出了這個結論。雖不清楚其錢財到底有多少，但綜合各方面的情形來看，

ぬけれど、色々の点から考えて、殺人の危険を犯してまで執着する程大した金額だとは思われぬ。たかの知れた金の為は何の罪もない一人の人間を殺してうというの
は、余りに残酷過ぎはしないか。併し、仮令それが世間の標準から見ては大した金額でなくとも、貧乏な路屋には十分満足出来るのだ。のみならず、彼の考によれば、問題は金額の多少ではなくて、ただ犯罪の発覚を絶対に不可能ならしめることだった。その為には、どんな大きな犠牲を払っても、少しも差支ないのだ。

殺人は、一見、単なる窃盗よりは幾層倍も危険な仕事の様に見える。だが、それは一種の錯覚に過ぎないのだ。成程、発覚することを予想してやる仕事なれば殺人はあらゆる犯罪の中で最も危険に相違ない。併し、若し犯罪の軽重よりも、発覚の難易を目安にして考えたならば、場合によっては（例えば路屋の場合の如きは）寧ろ窃盗の方が危い仕事なのだ。これに反して、悪事の発見者をバラしてう方法は、残酷な代りに心配がない。昔から、偉い悪人は、平気でズバリズバリと人殺しをやっている。彼等が却々つかまらぬのは、却ってこの大胆な殺人のお蔭なのではなからうか。

では、老婆をやっつけるとして、それには果して危険がないか。この問題にぶっつかってから、路屋は数ヶ月の間考え通した。その長い間に、彼がどんな風に考を育て行っただか。それは物語が進むに随って、読者に分るこ

應該還未巨大到要冒險殺人的數額。況且，就為了這點有限的錢財，去加害一個無辜之人，是否太過殘忍了呢。以社會上的標準來看，這點數額或許不足掛齒，然而對於窮困潦倒的露屋來說，卻足以令其滿意了。不僅如此，他考慮問題的重點並不在於數額多少，而是如何讓犯罪不被覺察。為此，無論要付出多大犧牲，他都在所不惜。

謀殺，看起來比單純的盜竊要危險好幾倍。然而，這其實不過是種錯覺而已。當然，若是罪行終將敗露，那麼謀殺無疑是所有犯罪中最危險的。不過，若不論罪行的輕重，而以是否容易被發現為判斷標準來看的話，根據情況（比如路屋的情形），不如說盜竊來得更為危險。反觀而言，索性把現場的目擊證人除掉，雖殘酷但不會留下後遺症。從古至今，大奸大惡之徒們，冷靜沉着，利落乾淨地屠戮，之所以難以被懲處，難道不正是因為他們膽大包天嗎？

那麼，要除掉老太婆，到底危不危險呢？從開始有這個念頭，路屋耗費了數月時間來考慮這問題。如此長的時期，他到底是怎麼計劃的呢。隨着故事展開，讀者就會明白，這裡先省略不談。不管怎樣，他的計劃一般人絕對無法想像，

とだから、ここに省くが、兎も角、彼は、到底普通人の考え及ぶことも出来ない程、徹に入り細を穿った分析並に総合の結果、塵一筋の手抜きもない、絶対に安全な方法を考え出したのだ。

今はただ、時機の来るのを待つばかりだった。が、それは案外早く来た。ある日、齋藤は学校関係のことで、女中は使に出されて、二人共夕方まで決して帰宅しないことが確められた。それは丁度路屋が最後の準備行為を終った日から二日目だった。その最後の準備行為というのは（これだけは前以て説明して置く必要がある）嘗て齋藤に例の隠し場所を聞いてから、もう半年も経過した今日、それがまだ当時のままであるかどうかを確める為の或る行為だった。彼はその日（即ち老婆殺しの二日前）齋藤を訪ねた序に、初めて老婆の部屋である奥座敷に入って、彼女と色々世間話を取交した。彼はその世間話を徐々に一つの方向へ落して行った。そして、屢々老婆の財産のこと、それを彼女のどこかへ隠しているという噂のあることなぞ口にした。彼は「隠す」という言葉の出る毎に、それとなく老婆の眼を注意した。すると、彼女の眼は、彼の予期した通り、その都度、床の間の植木鉢（もうその時は紅葉ではなく、松に植えかえてあったけれど）にそっと注がれるのだ。路屋はそれを数回繰返して、最早や少しも疑う余地のないことを確めることが出来た。

通過細緻入微地分析，再綜合出結論，他整理出了百密而無一疏，絕對穩妥周全的計劃。

現在，只需等待時機的來臨。這不，機會比預想的來得要早。某日，齋藤因學校有事，女傭則被差遣外出，路屋獲悉兩人不到傍晚肯定不會回到宅中。這正巧是路屋做好最後準備的兩天之後。所謂最後準備是這麼回事情（需要在此做下說明）。從齋藤那兒探聽到錢財的藏匿之所，業已過去了半年。為了確證藏匿之所未出現變化，路屋做了這麼件事兒。那天（即謀殺老婦的兩天前）他去探訪齋藤之際，第一次進到老婦住的裡間，與她東拉西扯地閒聊了一陣。路屋刻意將閒聊的話題引向一個方向。同時，屢次提及老婦的財產，告訴她聽人說起過藏匿財產的事情。每次說到「藏匿」這個詞的時候，路屋暗中觀察着老婦的眼神。與其預想的相同，老婦的目光果然每次都悄然落到客廳的花盆上（那時栽種的已非紅葉，改換成了松樹）。路屋反覆試探了多次後，確定已無須再做任何懷疑了。

さて、愈々当日である。彼は大学の正服正帽の上に学生マントを着用し、ありふれた手袋をはめて目的の場所に向った。彼は考えに考えた上、結局変装しないことに極めたのだ。若し変装をすれば、材料の買入れ、着換えの場所、其他様々の点で、犯罪発覚の手掛りを残すことになる。それはただ物事を複雑にするばかりで、少しも効果がないのだ。犯罪の方法は、発覚の虞のない範囲に於ては、出来る限り単純に且つあからさまにすべきだと言うのが、彼の一種の哲学だった。要は、目的の家に入る所を見られさえしなければいいのだ。仮令その家の前を通ったことが分っても、それは少しも差支ない。彼はよく其辺を散歩することがあるのだから、当日も散歩をしたばかりだといふ抜けることが出来る。と同時に一方に於いて、彼が目的の家に行く途中で、知合いの人に見られた場合（これはどうしても勘定に入れて置かねばならぬ）妙な変装をしている方がいいか、ふだんの通り正服正帽でいる方がいいか、考えて見るまでもないことだ。犯罪の時間についても待ちさえすれば都合よい夜が——斎藤も女中も不在の夜があることは分っているのに、何故彼は危険な昼間を選んだか。これも服装の場合と同じく、犯罪から不必要な秘密性を除く為だった。

併し目的の家の前に立った時だけは、流石の彼も、普通

終於、到了當天。落屋穿戴好大學正式的制服制帽，又在外面罩了件學生披風，戴好常見的手套，朝着目的地走去。他權衡多次，決定還是不裝扮成其他模樣。若是要裝扮，需購買材料，還得考慮換裝的地方，加上其他各種各樣的因素，會留下蛛絲馬跡致使罪行敗露。這只會讓事情變得複雜化，卻無任何效果。從犯罪手法來說，在不必擔心被識破的前提下，手法應盡量簡潔明快且直截了當。這是落屋的一種哲學。關鍵是，只要在進入宅子時不被撞見就萬事大吉了。即便曾經在那幢宅子前經過，也完全不必在意。他經常會在那附近散步，當天也只需說剛剛散步，即可逃脫嫌疑。同時，也會出現另一種可能。即在去宅子的途中，可能被熟人撞見（這種情況必須考慮到）。是裝扮成奇奇怪怪的形象好，還是跟平日一樣，穿戴正式的制服制帽更好，很顯然這問題不言自明。就犯罪時間來說，只需耐心等待，應該可以選擇條件更好的晚間，而落屋明明知道齋藤和女傭當晚均不在宅中，為何他還會選擇風險較大的白晝下手呢？這也與到底穿戴何種服裝的情由相同，是為了消除犯罪中所不必要的秘密性。

然而當落屋一旦站立在那所宅子前面的時候，即便是謀

の泥棒の通りに、いや恐らく彼等以上に、ビクビクして前後左右を見廻した。老婆の家は、両隣とは生垣で境した一軒建ちで、向側には、ある富豪の邸宅の高いコンクリート塀が、ずっと一町も続いていた。淋しい屋敷町だから、屋間でも時々はまるで人通りのないことがある。落屋がそこへ辿りついた時も、いい鹽梅に、通りには犬の子一匹見当らなかった。彼は、普通に開けば馬鹿にひどい金属性の音のする格子戸を、ソロリソロリと少しも音をたてない様に開閉した。そして、玄関の土間から、極く低い声で（これらは隣家への用心だ）案内を乞うた。老婆が出て来ると、彼は、齋藤のことについて少し内密に話し度いことがあるという口実で、奥の間に通った。

座が定まると間もなく、「あいにく女中が居りませんので」と断りながら、老婆はお茶を汲みに立った。落屋はそれを、今か今か待構えていたのだ。彼は、老婆が襖を開ける為に少し身を屈めた時、やにわに後から抱きついて、両腕を使って（手袋ははめていたけれども、なるべく指の痕はつけまいとしてだ）力まかせに首を絞めた。老婆は咽の所でグッという様な音を出したばかりで、大して藻掻きもしなかった。ただ、苦しまぎれに空を掴んだ指先が、そこに立ててあった屏風に触れて、少しばかり傷を拵えた。それは二枚折の時代のついた金屏風で、極彩色の六歌仙が描かれていたが、その丁度小野の小町の顔の所が、無惨にも一寸許り破れたのだ。

無遺策の他、卻也跟個小毛賊般，不，甚至於比小毛賊更慌張，戰戰兢兢，前後左右四面張望了一番。老婦的宅子獨棟而建，矮灌木修成樹籬與兩邊的鄰居分開。對面是某個富豪的宅邸，高高的水泥牆持續了百餘米^①。僻靜的住宅區中，即使是白晝，有時也似杳無人跡。落屋輾轉到那裡時，機緣巧合，路上連小狗都不見一條。若是就像平常這麼打開，格子門定會發出尖利刺耳的金屬聲。落屋輕手輕腳，悄無聲息地將格子門打開又關上。然後在宅門入口壓低了嗓音（為了不讓聲音傳到鄰居那裡），招呼老婦。待其出來後，他編了個藉口，說要告知一些關於齋藤的隱秘之事，於是，落屋被領進了裡間。

剛坐定沒多久，老婦邊解釋「女傭不巧正好不在」，邊站起身去倒茶。落屋心急火燎，等的就是這當口。趁其拉開隔間紙門，微微屈身彎腰之際，陡然從背後抱住老婦，兩手使出渾身氣力掐住她的脖頸（為不留下指紋，還戴着手套）。只聽老婦咽喉處發出咕的聲響，並未如何掙扎。不過，因痛苦而虛抓的手指劃到了近旁立着的屏風，留下了少許刮痕。這是一扇對摺的，有點年頭的金色屏風，描畫着色彩斑斕的六歌仙^②。就在小野小町的臉部，慘然留下了一道刮痕。

① 一町：日本傳統長度單位，相當於 109 米。

② 日本古代詩集《古今和歌集》的序言中記載的六位詩人。即僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黑主這六人。

老婆の息が絶えたのを見定めると、彼は死骸をそこへ横にして、一寸気になる様子で、その屏風の破れを眺めた。併しよく考えて見れば、少しも心配することはない。こんなものが何の証拠になる筈もないのだ。そこで、彼は目的の床の間へ行って、例の松の木の根元を持って、土もろともスッポリと植木鉢から引抜いた。予期した通り、その底には油紙で包んだものが入れてあった。彼は落ちつきはらって、その包みを解いて、右のポケットから一つの新しい大型の財布を取り出し、紙幣を半分ばかり（十分五千元はあった）その中に入れて、財布を元のポケットに納め、残った紙幣は油紙に包んで前の通りに植木鉢の底へ隠した。無論、これは金を盗んだという証拠を晦ます為だ。老婆の貯金の高は、老婆自身が知っていたばかりだから、それが半分になったとて、誰も疑う筈はないのだ。

それから、彼はそこにあった座蒲団を丸めて老婆の胸にあてがい（これは血潮の飛ばぬ用心だ）左のポケットから一挺のジャックナイフを取り出して歯を開くと、心臓をめがけてグサッと突差し、ガイと一つ抉って置いて引抜いた。そして、同じ座蒲団の布でナイフの血のりを綺麗に拭き取り、元のポケットへ納めた。彼は、絞め殺しただけでは、蘇生の虞れがあると思ったのだ。つまり昔のとどめを刺すという奴だ。では、何故最初から刃物を使用しなかったかという点、そうしてはひょっとして自分の着物に血潮がかかるかも知れないことを虞れたのだ。

認定老婦完全断气後、路屋将屍體放平，盯着屏風の刮痕，若有所思地瞧了一會兒。不過，仔細想想，完全無須擔憂。這點破損根本不可能被當作甚麼證據。於是，他走到客廳，連根帶土將花盆裡的松樹整個兒拽了起來。果然不出所料，花盆底部有個用油紙包裹好的物件。路屋沉住氣，打開了包裹，從右側口袋掏出一個簇新的大皮夾子，將包裹裡約一半的紙幣（足足有五千日元）放入其中後，又把皮夾塞回口袋裡。接着，再把剩餘的紙幣用油紙跟之前一樣包好後隱藏於花盆底部。不用說，這是為了隱瞞將錢財盜走的事實。老婦藏錢的金額除其自身之外，無人知曉。又有誰會意識到如今只剩下一半了呢。

完成上述這些事情之後，路屋將近旁的坐墊團起，抵在老婆的胸口（為了防止血沫四散飛濺），從左側口袋中摸出一把摺刀，拉開刀刃，對着心臟深深一刀扎下去，再用力一剝後將刀拔了出來。接着，用同一塊坐墊把摺刀上的血跡擦拭乾淨後放回原來的口袋裡。路屋擔心僅靠掐脖子沒準兒會留下復蘇的遺患，這也就是老早說的，所謂抽薪止沸，斬草除根吧。那，為何不一開始便選擇用刀呢。那是因為路屋擔心血沫有可能會濺到自己的衣服上。

ここで一寸、彼が紙幣を入れた財布と今のジャックナイフについて説明して置かねばならぬ。彼は、それらを、この目的丈けに使う為に、ある縁日の露店で買求めたのだ。彼はその縁日の最も賑う時分を見計らって、最も客の込んでいる店を選び、正札通りの小銭を投出して、品物を取ると、商人は勿論、沢山の客達も、彼の顔を記憶する暇がなかった程、非常に素早く姿を晦ました。そして、この品物は両方とも、極くありふれた何の目印もあり得ない様なものだった。

さて、路屋は、十分注意して少しも手掛りが残っていないのを確かめた後、襖のしまりも忘れないでゆっくりと玄関へ出て来た。彼はそこで靴の紐を締めながら、足跡のことを考えて見た。だが、その点は更らに心配がなかった。玄関の土間は堅い漆喰だし、表の通りは天気続きでカラカラに乾いていた。あとには、もう格子戸を開けて表へ出ることが残っているばかりだ。だが、ここでしくじる様なことがあっては、凡ての苦心が水の泡だ。彼はじっと耳を澄して、辛抱強く表通りの跫音を聞こうとした。……しんとして何の気はいもない。どこかの内で琴を弾じる音がコロリンシャンと至極のどこかに聞えているばかりだ。彼は思い切って、静かに格子戸を開けた。そして、何気なく、今暇をつげたお客様だという様な顔をして、往来へ出た。案の定そこには人影もなかった。

その一劃はどの通りも淋しい屋敷町だった。老婆の家か

這裡必須對他放入紙幣的皮夾和摺刀稍作解釋。兩樣東西正是為了這次的謀殺，在某次廟會的攤子上買的。路屋瞅準那次廟會最熱鬧的當口，挑了家生意最興隆、顧客最擁擠的攤子，按所示的價格丟下幾個錢，抓了東西扭頭就走。攤主自不用說，還有那麼多顧客，根本沒有時間去記住他的長相。而且，這兩樣東西均極為平常，不帶有任何顯著的標識。

路屋再仔細地檢查了一遍，確保未留下任何線索後，慢慢走出了房門。臨走沒忘記將紙拉門關好。他在門口一面繫鞋帶，一面琢磨着腳印的問題。不過，這點更無須擔憂。進門脫鞋的地方是用堅硬的灰泥鋪製的，且一連多日天氣晴好，宅子前面的道路也很乾燥。現在，只剩下拉開格子門走出宅子這一件事了。然而，要是這環節出了甚麼岔子，則所有苦心均前功盡棄。他一動不動，豎起耳朵仔細聽辨宅子前面道路上的跫跫足音……街上寂靜非常，並無任何動靜。只聽得不知何處宅院傳來錚錚琴音，悠揚至極。路屋橫下心來，悄然無聲地將格子門拉開。若無其事地，以剛告辭的客人般的神態，走到街上。果然，街面空空蕩蕩，人影皆無。

這附近無論哪條街都是僻靜的街鎮。距離老婦家四五百

ら四五町隔った所に、何かの社の古い石垣が、往來に面してずっと続いていた。路屋は、誰も見ていないのを確認した上、その石垣の隙間から兇器のジャックナイフと血のついた手袋とを落とし込んだ。そして、いつも散歩の時には立寄ることにしていた、附近の小さい公園を目ざしてブラブラと歩いて行った。彼は公園のベンチに腰をかけ、子供達がブランコに乗って遊んでいるのを、如何にも長閑な顔をして眺めながら、長い時間を過ごした。

帰りがけに、彼は警察署へ立寄った。そして、「今し方、この財布を拾ったのです。大分沢山入っている様ですから、お届けします」

と云い乍ら、例の財布をさし出した。彼は巡査の質問に答えて、拾った場所と時間と（勿論それは可能性のある出鱈目なのだ）自分の住所姓名と（これはほんとうの）を答えた。そして、印刷した紙に彼の姓名や金額などを書き入れた受取証見たいなものを貰った。なる程、これは非常に迂遠な方法には相違ない。併し安全という点では最上だ。老婆の金は（半分になったことは誰も知らない）ちゃん元々の場所にあるのだから、この財布の遺失主は絶対に出る筈がない。一年の後には間違なく路屋の手に落ちるのだ。そして、誰憚らず大びらに使えるのだ。彼は考え抜いた揚句この手段を採った。若しこれをどこかへ隠して置くとするか、どうした偶然から他人に横取りされまいものでもない。自分で持っているか、それはもう考えるまでもなく危

米的地方、有座不知名神社。陳舊の石牆朝着街面向前延伸。路屋確信沒有任何目擊者後，將兇器摺刀和沾血的手套丟進了石牆的縫隙中。接着，朝着平日裡散步時經常路過的、附近的小公園緩步走去。他在公園的長凳上落座後，瞅着孩童在鞦韆上嬉戲玩耍。路屋讓自己的神態顯得安詳閒適，在那裡消磨了相當長的一段時間。

回去的路上，他順道去了趟警署。

「方才撿到個皮夾。看上去裡面錢不少，所以呢，還是應該交由警察來處理。」

路屋邊說邊把之前的皮夾遞了過去。對巡警的詢問一一作答，撿到皮夾的地點和時間（當然都是些編出來的、但有可能發生的瞎話）以及自己的姓名住址（這些則是真的）。接着，路屋領取了填有他姓名、金額等，打印好的、類似於收條的回執。這無疑是路屋的迂迴策略，不過，的確也找不出比這更安全的方法了。老婦的錢財（無人知曉已然只剩一半了）還在原來的地方，再者皮夾的失主是絕然不會出現的。一年之後，這皮夾毫無疑問將成為路屋的囊中之物。接下來，就再也不用提心吊膽，可以光明正大地花這筆錢了。路屋思來想去，結果選擇了這樣的方式。如果將這筆錢藏匿在某處，很有可能會出現某種偶然，而被別人奪去。如果自己持有，想都不用想肯定是相當危險的。不光如此，萬一老婦記錄下了紙幣的號碼呢，若用此法則根本無須擔驚受怕了（不過有

けん 險なことだ。のみならず、この方法によれば、まんいちろう ば 万一老婆が
しへい ばんごう ひか 紙幣の番号を控えていたとしても少しも心配がないのだ。
もつと てん で き だ さく だいたいあんしん
(尤もこの点は出来るだけ探って、大体安心はしていたけれど)

「まさか、自分の盗んだ品物を警察へ届ける奴があるとは、ほんとうにお釈迦様でも御存じあるまいよ」

かれ わら 彼は笑いかみ殺しながら、心の中で呟いた。

よくじつ ふきや げしゆく いっしつ つね かわ あんみん め ぎ
翌日、路屋は、下宿の一室で、常と変らぬ安眠から目覚
めると、欠伸をしながら、枕許に配達されていた新聞を拵
げて、しゃかいめん みわた かれ 彼はそこに意外な事実を発見し
ちよつとおどろ ちよつとおどろ だが、それは、決して心配する様な事柄で
はなく、却って彼の為には予期しない仕合せだった。とい
うのは、ゆうじん さいとう けんぎしゃ あ げられたのだ。けんぎ
う りゆう かれ みぶん ふそうおう たいきん しよじ
を受けた理由は、彼が身分不相応の大金を所持していたか
らだと記してある。

「俺は斎藤の最も親しい友達なのだから、ここで警察へ
しゅつとう いろいろと ただ しぜん 出頭して、色々問い訊すのが自然だな」

や さつそくきもの き が あわ けいざつしよ で か
路屋は早速着物を着換えると、遽て警察署へ出掛けた。
それはかれが昨日財布を届けたのと同じ役所だ。何故財布を
届けるのをかんかつ ちが けいざつに なかったか。いや、それと
も亦、かれの一流の無技巧主義で態としたことなのだ。彼
は、かぶそく ていど しんぱいそう かお さいとう あ
は、過不足のない程度に心配相な顔をして、斎藤に逢わせ
て呉れと頼んだ。併し、それは予期した通り許されなかつ
た。そこで、かれ さいとう けんぎ う かけたわけ いろいろ と ただ
た、彼は、斎藤が嫌疑を受けた訳を色々問い訊

關是否記錄下紙幣號碼這點，路屋盡可能地打探過一番，基
本還是無須擔憂的)。

「竟然有人會把自己偷來的東西交給警察，這恐怕連如來
佛祖都想不到。」

路屋強忍住竊喜，在心中自言自語道。

第二天，路屋在租住的房間裡，與平時一樣從熟睡中醒
來，打着哈欠，攤開枕邊送來的報紙，瀏覽着社會新聞，卻
被一條意外的消息震了一下。不過，這倒並非是讓他擔憂的
消息，反而帶給他意想不到的驚喜。報道稱，好友齋藤被當
作嫌疑犯抓了起來。其理由是，他持有與其身份不符的大筆
財產。

「作為齋藤最為親密的好友，去警署跑一趟，探聽下各種
情況會顯得比較自然。」

路屋趕緊換上和服，匆匆忙忙跑去了警署。與昨天上交
皮夾的地方是同一處。那為何不選擇轄區內其他警署去上交
皮夾呢？這其實又是路屋秉承其獨到的非技巧主義而有意為
之的。他恰如其分地裝出一副看起來頗為擔憂的神色，請求
與齋藤會面。然而，如同預想的一般，要求未被准許。於是，
他跟警察打探起齋藤被當作嫌犯的原因來，並大致了解了事
情的原委。